

三学年の「古典分野」の教材として、どの教科書でも扱う「おくのほそ道」の冒頭の部分。

売り払ってしまったのだと。たしかに芭蕉は「おくのほそ道」の旅を最後に大きな旅には出ず、やがて臥すわけなので、根拠とはなりえよう。

その1の回答については、事実上そいう側面(旅にはお金が必要)であったにちがいないから、これも正解?

なにかモヤモヤしたものを感じているのは私だけなのか?

bの疑問に関してはどうであろう。

〈その1〉ここに確かに私(芭蕉)は居たのだということを残すため

〈その2〉教科書の訳に、「門出の記念」ってあるから自分の旅立ちを祝ってじゃないの?

といった発言が予想できる。門出=旅立ち はいいのだが、生徒のほとんどが「芭蕉の旅立ち」ととらえてしまうようだ。

ここまでをまとめると、「筆者芭蕉は最後の旅と決意を固め、新たな旅の資金を捻出するため家を譲り、ここで過ごした足跡を残すと同時に自らの新たな旅立ちを祝って、庵の柱に面八句を掛けておいた。」となってしまふ。

もっともらしい解答と思いきや、本筋にもどって、「筆者芭蕉はこの冒頭の段で何を述べたかったのか?」を考えたとき、こんな打算と自己顕示欲に充ちたこと(旅に出るお金のために家を売ったとか、自分が住んでいた確かな証を残す)を言うために冒頭の段があったとは考えにくい。滑稽さが尊ばれる俳諧を芸術性の高い「蕉風」にまで押し上げた芭蕉が「自分の生きた証」やら「金が必要だったんだ」やら、下衆の極みともいえる「わび・さび」のかけらも感じられないことをはたして述べたかったのだろうか。裏の事情で金が必要だったとしてもそれを表に出して述べることに何の趣もあつたものではない。

余談として、「庵の柱に掛けおく」の「庵」について、「正進社 新国語の便覧」では、①移り住んだ杉風の別荘を指す ②もとの芭蕉庵を指すと二説を併記している。なんでそうするのかいふと、さすがの芭蕉でも、他人に譲り住人のいる家に、あつかましくもあがり込み、柱に面八句をかけたとは考えにくいためであろう。よって、杉風の別荘という説もありうるのではないか、と想像できる。

疑問とも何とも言えぬもやもやを快刀乱麻を断つがごとく、すべてのなぞをすっぱり解き明かす答えが一つある。

「家(元芭蕉庵)の門出(旅立ち)」の段ととらえればよい

「年」も「船頭」も「馬子」も旅人、すべてのものは旅人であり、自分も先人にみならってうつりゆく旅人でありたい。この無常観と呼応する思いの中で、忘れものといえば草庵である。主人が旅に出れば、蜘蛛の巣がはってしまっただけのひなびた家と化すだけである。そんな草庵に新たな人生を送らせんと旅立たせたのであろう。

そう考えれば、面八句を柱に掛けたことも解決できる。譲る先の住人には女の子のいる家庭だとは知った上で、引っ越してくる前に、草庵の柱に面八句を掛けておいたわけであり、そこには「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」のみが書かれていたと考えられる。この発句以降の今後は、(連歌にならぬ)新たな住人とともに新たな人生を紡いでいってほしいという願いだのとらえればよいだろう。

「なるほど」という言葉が死語となり、「なるほど」いえる事柄が本当に少ない中で、我々教師が「なるほど」といえる内容をどれだけ教えられているのか。「こうなってんだからこう覚えとけ!」という手法の中に課題や疑問を見つけた隙間もなく、謎を解明しようとする意欲や発想も浮かび上がることはないだろう。学問の楽しみを生徒に……。

※「蜘蛛の古巣をほらひて」の件は、庵の旅立ちへと繋がる伏線として欠かせない部分として、必ず触れることにしている。

※ネット上のQ&Aでは「Q:面八句にはどんな句があつたんですか?」に対し「A:面八句が発見されていない以上、わからないというのが正解です。」と発言が……。※「古人」芭蕉の尊敬してやまない詩人:①李白[冒頭:百代の過客]②杜甫[夏草:国破れて山河あり]③西行[夏草:時の移るまで]④宗祇[冒頭:面八句(連歌のなられれ)]

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をほらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えむと、そぞろの物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るものにつかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月まつ心にかかりて、住めるかたは人に譲りて、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家  
面八句を庵の柱に懸け置く。

月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去つては新しくやってくる年もまた旅人に似ている。一生を舟の上で暮らす船頭や、馬のくつわを取って老年を迎える馬子などは、毎日毎日が旅であつて、旅そのものを自分のすみかとしている。(風雅の道に生涯をささげた昔の人々の中にも、旅の途中で死んだ人が多い。私もいつの頃からか、ちぎれ雲のように風に誘われて、あてのない旅に出た、気持ち動いてやまず、(近年はあちこちの海岸をさすらい歩き、去年の秋、隅田川のほとりのあばらやに(帰り)、蜘蛛の古巣をほらひて、住んでいるうちに)、次第に年も暮れ、新春ともなると、霞の立ちこめる空の下で白河の関を越えたいものだと、そぞろ神が乗り移つてたのもうそろそろとさせられ、道祖神が招いているように、何も手につかないほどに落ち着かず、股引の破れたころを縫ひ、道中笠のひもを付け替え、三里に灸すゆる(など旅の支度にかかる)ともう、松島の月(の美しさは)と、そんな(こ)がますます気になって、今まで住んでいた庵は人に譲り、杉風の別荘に移つたのだが、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家  
(元の草庵にも、新しい住人が越してきて、私の住んでいたころのわびしさはうつつと変わり、華やかに雛人形などを飾っている。)

面八句を(門出の記念に)庵の柱に掛けておいた。

「光村」の教科書においては、上記のように解釈している。

指導としては、暗唱→内容把握と進めることが一般的なのだろうか。内容把握において、

①「月日」も旅人、「年」も「船頭」も「馬子」も皆、旅人。芭蕉が尊敬してやまない昔の詩人(李白・杜甫・宗祇・西行)も旅人であり、旅の途中で死んでいった。

芭蕉は「自分もそんな旅人でありたい」と願っている。前の旅から戻った芭蕉は、しばらくすると、次の旅のことを思い、いてもたってもいられなくなり旅の準備を始める。ついには江戸深川の「芭蕉庵」を人に譲ってしまう。その際、「草の戸も…」句を記した「面八句」を家の柱にかりけておいた。となるのだが、そもそもこの冒頭の段において、

Q 筆者芭蕉は何を述べたかったのか?

もう少し具体的にいうなら、

- a なぜ、芭蕉庵を人に譲ったのか?
- b 柱に懸けおいた面八句は何のため?

という疑問が浮かび上がる。

生徒にa・bの疑問(課題) 自体を見つさせろの(に)疑問と感じさせるの(に)苦慮する。「何か変なところや疑問に思うところはないか?」と聞いてみて、疑問にすら感じてないのが普通である。ようやく、「自分の家を売り払っちゃったんですね?」と出てくるくらいだろう。

そこから「a なぜ、売り払ってしまったのか?」と投げかければ、もっともらしい答えはいくつかあがる。

〈その1〉旅の資金を捻出するため

〈その2〉最後の旅と決意を固めるため

その2あたりの答えが出れば、「それらしい解答」とはいえるのかもしれない。「古人のごとく旅で死んでやむなし。家は必要ない」と覚悟を決めて